

個人

震災後、スピーディーに動いたのは個人。
日ごろからの顔の見える活動が大事。

いわき市

里見 喜生 いわき湯本温泉 元禄彩雅宿古滝屋

取材日 2011.8.30

福島県の温泉・いわき湯本温泉にある温泉旅館の若旦那。百年後を視野に入れた地域づくり、人づくりを目指してきたが、地震による建物被害のため休業中。震災後は風評被害に苦しむ生産者を応援する物産展を各地で開催、沖縄伝統芸能で大震災の犠牲者を慰霊し再生を祈願する催事を企画するなど、さまざまな復興支援活動に従事している。

3月11日 14時46分

郡山へ移動中で高速道路を走行していた時に大きな揺れを感じ、近くのサービスエリアに避難した。車はほとんど停まっていなかった。車を止めラジオをつけた。「津波が10m」と聞いて、これは尋常じゃないなと感じた。やがて高速道路が閉鎖となり一般道へ降ろされた。幹線道路だけでなく細い道路も寸断されていた。携帯電話もつながらず知人を介して家族や友人に無事を伝えてもらった。一緒にいた方が近くに住んでいたためその方の所に2日ほどお世話になった。いわきの温泉の水位は10m下がった。旅館組合でも1,200年続いた温泉地がここで途絶えてしまうのではないかと困惑していた。

「オンパク」でのつながり

「オンパク」とは観光でお客様を呼ぼうという事ではなく、ひとつのまちづくりだ。町に魅力が無いと言う声が多いが、実はそうではない。絵に描いた様な風景は無いが、それぞれの町には文化や歴史や芸能があり、何よりもおもしろい人がある。魅力が無いのではなく魅力を表現しきれてないところに要因がある。隣町できれいな建物を造ったからこちらにもというのでは意味が無く、きりが無い。そこで、「あるもの磨き」をしていくことを理念とし、この活動を通してコミュニティ形成のきっかけになればと思い描いていた。

この活動は同じ理念を持ち全国各地で行われている。震災後、そのネットワークが非常にスピーディーに動き、優しくて効率的だった。2月26日に、今後「オンパク」に取り組みたいというところが集まりいわき市小名浜で研修会を行っていた。その時は震災で小名浜が壊滅状態になるとは思っていなかった。震災から1週間後、あの時研修に参加していた水上町の人物が物資を届けに来てくれた。その頃はガソリンも不足し、道路も封鎖され、宅配便もいわきエリアは原発で危険なので配送しないという状況だったが、車で駆けつけて



くれた。さらにその1週間後には水上町の町長が自ら避難所を回ってくれた。

実は、水上町ではどこかを支援したいと考えていたが、どこに問い合わせても「いまは混乱しているから待ってくれ」との返答だったそうだ。言葉には出さないが迷惑だというニュアンスであった。そこで、オンパクつながりのあるいわき市をピンポイントで支援しようと、町長自ら物資を含め1億円の予算をつけてくれた。地域を越えたつながりだった。宇部市もオンパクつながりで3月28日に支援金を送ってくれた。

支援の動き

いわきは原発の影響もあったせいも、ボランティアの入りか躊躇され、物資の入りも遅かった。加工品や去年取れたお米が全然売れなくなってしまっていた。震災前の加工品や、震災前に採れたお米は安全なはずなのに、それすら売れない。大手スーパーに頼んでも取り合ってもらえないという。まさに風評被害だ。物資を送ってもらうのもありがたいのだが、いまは経済的に困っている。ここでもやはり地域のつながりが活きた。風評被害に苦しむ方を応援しようと、全国10ヶ所以上でいわきの加工品などを販売する物産展を開催した。このイベントで地元の方とのつなぎ役

として、各イベントでいわきの加工品と安全性のPRをしたが、西日本の人は震災の実感が全くなかった。実情を話したり写真を見せたり生の声や感情をストレートに話すことで、やっと大震災の現状が伝わった。

震災直後、沿岸部の小名浜と勿来（なこそ）にボランティアセンターが立ち上がったが、いわきは今まで震災に遭ったことがない。ボランティアセンターでも何をどうして良いのかわからなかった。小名浜は民間で運営が始まったが、勿来は早々に宇部市の災害復興メンバーが応援に駆けつけてくれた。延べ100人以上が来て、日替わりで立ち上げと2ヶ月間の運営を行ってくれた。宇部市も顔が見えるまちづくり仲間であり、炭坑つながりでもあるいわき市を支援しようと、1億円の予算を確保して支援を行ってくれた。

今後のステップとして、もっと今の状況を見てもらいたいと思っている。いわきに来たいという話があればガイド役として案内したい。原発ぎりぎりのところ、原発対応の最前線、さらに被災した海岸や仮設住宅、地元の農業・漁業に携わっている方々のお話を聞き、食事は地元のお寿司屋さんへ行く。そこに並んでいるネタは、本来は久ノ浜産や小名浜産など地元で獲れる魚貝であるはずのものが、宮崎産や山口産に変わっている。押しつけるのではなく、異常な状態であることを見てもらいたい。

震災を振り返って

震災後、支援物資配給でスピーディーに動いたのは大きな組織ではなく個人。町の人たちが個人レベルで「あの人が困っているからなんとかしてあげよう…」と集まった。日頃から人の顔が見える活動が大事なのだなと感じた。これができているところとできていないところの差は大きい。

例えば東京では隣の子どもの顔もわからない。そんな環境で、有事の緊急避難の時に「おじさんと一緒においで」とは言えない。コミュニティが形成されているところは、このおじさんはいつも挨拶している人だと信頼感があり、地域にとってそれはとても大切なことだと実感した。

これから

放射線が無ければ日常と変わらない。大人は経済的な部分などで直接感じられるが、子どもはわからない。昔は子どもに外で遊べと言ってきた。ところが今はそういうわけにはいかない。とは言え太陽の下で遊ばせたい。

今回の震災では大人も精神的にダメージを受けている。そのケアが必要ではないかと思う。大人の

気持ちに余裕がないと子どもにも影響してしまう。子どもを守るためには大人向けのプログラムも必要なのではないかと思う。



撮影：2011.4.14 歌手がいわき市の避難所を訪問



撮影：2011.5.13 倒壊家屋の壁にスプレーでメッセージ



撮影：2011.5.13 一本の木だけが残る